ハンドル位置の調整

上例はファリャの「粉屋の踊り」のギター二重奏への編曲譜の一部です。いわゆるノンレガートという奏法、控えめなスタッカートというべきか、微妙に音を短くしていくアーティキュレーションが第2ギターにあって、一般にそれはスタッカートの点とレガートのスラー曲線の組み合わせで表されます。ここでは上声の四分音符と下声の八分音符の双方にその表記がありますが、前回に解説しましたように、アーティキュレーション・アイテムの「自動判別」機能によって自動的にスタッカートの点が符尾側に付きます。けれども、その場合の水平位置は符頭の中心に合わされるようになり、本例のような符尾揃えにはなりません。この様式感覚には二派あって、どちらが正しいかといった問題ではありませんが、仮にこのような符尾揃えにしたいならば、この自動判別は使えないことになります。逐一ドラッグするのも大変な手間になりますし、昨今の高性能マシンとモニターをもってしても画面表示と実際の出力結果が完全には一致しないことも考慮すれば、やはり手動調整不要の設定にしておきたいものです。

私が用いている方法は、スタッカートのアイテムを2つ装備するものです。一つは符頭付けにしておきますが、この場合は特に面倒な設定は必要ありません。デフォルトファイルに付いてくるアイテムの設計ボックスを出して、「位置」の「自動判別」を「符頭側」に変更するだけで OK です。そして、それを複製してから手を加えて「符尾側」のスタッカートを作っておくというわけです。

ここでの符尾側スタッカートの設計では「反転」という機能を使います。これは基本的に、五線や音符の上に付く時と下に付く時とでデザインが変わるアイテムに適用されるもので、フェルマータがその代表例です。スタッカートは上下のいずれに付いても単なる点なのですから、本例でも「反転」に指定しておくのは「メイン」と同じく 46 番の「点」です。その意味で不要な設定ではあるのですが、狙いはここで指定できる「ハンドル位置調整」にあります。「音符の上に置く場合」を「メイン記号」、「音符の下に置く場合」を「反転した記号」としておき、「ハンドル位置調整」ボックスを出して上例のような数値を入れれば、おおよそ符尾揃えの水平位置にもっていけます。メイン記号は音符の上、つまり符尾側で上に付くということですから、この場合の音符の符尾は上向きということになります。従ってその符尾は符頭の右端に位置することになるので、「横」に 12 evpu という調整値を施すわけです。反転記号の音符の下ならこの逆となり、–12 として符頭左端の符尾に揃えさせるという寸法です。

Finale に用意されているデフォルトファイルは非常に良く出来たものですが、楽譜の様式が多様なものである以上、それは決して万能ではなく、このように自ら工夫しなければならないことも数多くあります。また、数値の正負の基準ですが、Finale のそれは各ツールによって異なっており、いささか混沌としています。この場合のように上向きと右向きが正、下向きと左向きが負となることが多いのですが、小節スペースや組段マージンなどでは別の基準となるために、注意が必要です。

2010 年 10 月　梅本雅弘